

歌人 中城ふみ子

その生涯と作品

加藤孝男 田村ふみ乃

クロスカルチャー出版



映画「乳房よ永遠なれ」ポスター  
(縦1メートル50cm、横52cm)  
中川研一所蔵、日活。

## 目次

第1章	映画「乳房よ永遠なれ」のモデル	3
第2章	中城ふみ子と川端康成	11
第3章	「短歌研究」五十首応募作品の衝撃	21
第4章	『乳房喪失』の構成	29
第5章	シュルレアリスムと戦後短歌	37
第6章	中城ふみ子と与謝野晶子	47
第7章	大森卓と木野村英之介	53
第8章	中城ふみ子と現代短歌	59
第9章	中城ふみ子の作品解説	65
あとがき		136
中城ふみ子	略年譜	140
中城ふみ子	主要参考文献	156

第4章 『乳房喪失』の構成

中城ふみ子の歌集『乳房喪失』には、新人五十首詠の作品をふくむ四九一首が収録されているが、これを子細に読んでいくと、そこにも一つの物語が浮かび上がってくる。

アドルムの箱買い貯めて日々眠る夫の荒惨に近より難し

歌集の構成として、「夫の落剥」「不倫の恋」「離婚」「若い恋人との恋」「乳癌の発見」「手術」「癌病棟」というストーリーが浮かび上がってくる。そのため、離婚に到る過程を描く場合、夫の悪を強調する必要があった。

夫の博は、鉄道省札幌工事事務所の技師で、エリートコースを辿った人らしい。鉄道省とは、当時の国鉄を管轄する省庁で、昭和一八年一月から、運輸通信省に名称をかえて

いる。  
戦時下の昭和一七年に、一九歳で結婚したふみ子は、夫の転勤に従って、戦中・戦後と札幌、室蘭、函館、札幌と転居している。室蘭では米軍による艦砲射撃に怯えたこともあるが、戦争による徴兵や空襲による被害からは免れている。このようななかで、夫である博は、函館の五稜郭出張所の所長として栄転。青函連絡船の船着き場の設計などに携わったという。(『ドキュメント・中城ふみ子』)

だが、順調に見えた一家にも、いくつかの不幸が訪れる。一つは、昭和一九年一月に次男の徹が生後まもなく死亡したこと。同じく一月に博の母が亡くなった。こうしたことが一家に暗い影を落とし、さらに戦後、昭和二一年には、博が、所長の職を免じられ、  
四国へと転居している。しかし、翌年には国鉄を辞めて、ふみ子の故郷帯広へ引き上げている。

夫の荒惨の原因は、以上のようなことであったが、アドルムという睡眠用の鎮静剤を用いたというのは、ふみ子の脚色であるという。博が、後に「北海道新聞」の山名康郎に手渡したノートに、こうした実生活が記されていたといい、山名は「博は酒とも、アドルムとも無縁の人だった。(歌によって復讐された)」と山名に嘆いていた(『中城ふみ子の歌——華麗なるエゴイズムの花』(平成12))という。フィクションといえど、ここには究極に墮落した夫の姿が描かれており、これが離婚への伏線となっている。しかし、すべてが仮構の世界かというところではない。

倅せを疑はざりし妻の日よ蒨蕪ふるふを湯のなかに煮て

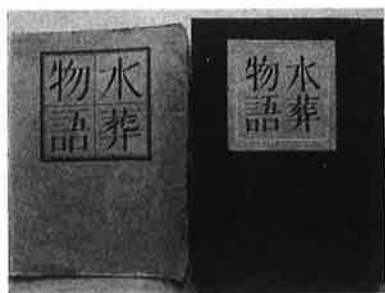
衿のサイズ十五寸の咽喉仏ある夜は近き夫の記憶よ

こうした結婚生活のリアルな歌も綴られている。

ふみ子は小田観螢主宰の「新墾」に所属し、さらにその支部ともいえる「辛夷」(野原水嶺編輯)にも所属し、野原に指導をうけている。いずれも太田水穂の「潮音」の傘下にある雑誌であった。水穂は、芭蕉に心酔し、象徴ということを唱えた歌人で、その弟子た

## 第5章

### シュルレアリスムと戦後短歌



塚本邦雄『水葬物語』（昭和26・8）

太平洋戦争末期には大規模な空襲が、北海道の主要都市を襲っている。札幌のように奇的に爆撃を逃れた都市もあったが、やはり日本という運命共同体のなかにあって、苦しい時期には違いなかった。

ふみ子も幼い子供を抱えながら爆撃に怯えていたことが、日記などからうかがわれる。しかし、ふみ子自身は戦争による甚大な被害をまぬがれていた。そのことは、「短歌研究」の受賞の言葉に書かれた「折々のつぶやきや叫びを声にしようとして始めた作歌が、あの戦争を殆んど無傷のままくぐり抜け」（「不幸の確信」という言葉からも分かる）。

戦後、新たな改革が進駐軍の方針によって、打ち出された。日本は六年近くの占領期間を経て、国際社会にふたたび返り咲くことになるが、この占領期間には、日本文化の見直しがいたるところで行われていた。

なかでも昭和二十一年一月にフランス文学者の桑原武夫によって書かれた「第二芸術——現代俳句について」（「世界」）は、大きな反響を呼んだ。戦時中に推奨された伝統文芸が、戦後社会において懐疑の目を向けられたからである。

その最初に現代俳句が桑原の批判の対象となっていた。大家や素人の作品を無記名で掲載し、その作者をあてるという方法によって桑原は、近代化した作家の文体を、俳句のよいうな短い詩型に盛ることはできないと言った。フランスの小説を研究する桑原の目からみると、俳句は「芸」にしか映らず、そうした創作物を芸術と呼ぶには躊躇されるので、

「第二芸術」と呼び、他と区別すべきだといった。

短歌についても同じで、後に「短歌の運命」（「八雲」、昭和22・5）という文章を書き、短歌のような短い詩型では、複雑な現代社会を描くことができないと述べた。その後、桑原の言説は、多くの論議を巻き起こし、こうしたものをまとめて第二芸術論と呼んだのである。

なかでも小野十三郎によって書かれた「奴隷の韻律」（「八雲」、昭和23・1）は、短歌の韻律や構造に対する嫌悪感を表明したものである。こうしたものを奴隷のリリシズム（抒情精神）と呼び、多くの歌人に衝撃を与えた。いわゆる戦後の短歌は、こうした否定論にどのように応えていくかというところが問われていたのである。

こうしたなかで短歌の総合誌である「短歌研究」では、中井英夫編集長が、新人の発掘に力を注いでいた。昭和二十六年には塚本邦雄の『水葬物語』が出版され、すでに塚本の歌に着目していた中井は、同誌で「モダニズム短歌特集」（昭和26・8）を企画している。

塚本邦雄は戦後短歌の考え方を大きく転換させた歌人であるが、この時点ではまだ無名な新人であった。『水葬物語』では次のような世界が描かれていた



映画「アンダルシアの犬」(1929年公開)

聖母像ばかりならべてある美術館の出口につづく火薬庫  
 痙攣<sup>ひきつ</sup>れる死鷄の眼、輪唱の 輪唱の輪のひろがるなかに

二つのイメージが鮮烈に対照されている。こうした作品は、菱川善夫によって「辞の断絶」と呼ばれたが、それは二つのイメージを鮮やかに対立させることにあった。塚本は短歌の世界に蔓延する写実の手法を離れて、「幻想」というキーワードによって、短歌の世界を変革していった。

聖母像ばかりが並べてある美術館がヨーロッパにあるのかどうか分らないが、その美術館からは確実に火薬庫へと道が通じている。キリストの愛を説く聖母像と、戦争の弾薬を納めた火薬庫という真逆なものを、一首のなかに結び合わせることによって、危機意識を創出している。

さらに二首目は、取り囲まれ、糾弾されつつある鷄のその周囲で輪唱の場が広がりをみせているという。しだいに籠の中の鳥は追い詰められていく。これは戦後社会の中で起こった戦争犯罪人や、あるいはレッドパージによる共産主義者への弾圧などがそうであったのかもしれない。

塚本の手法は昭和三〇年代において花開いていくのであるが、この時点では非常にわかりやすいイメージの対照をみせている。小野十三郎が批判した短歌のウエットな韻律をドライなものに変え、調べを屈折させることで、詩としての短歌を甦らせようとしていた。

塚本邦雄は「零の遺産」という文章の中で、〈僕たちはアバンギャルドに関する限り何ものをも継承しなかった〉と記したが、のちに前衛短歌の騎手として短歌の世界を変革させた塚本邦雄の第一声である。

こうした動きは中城ふみ子の短歌とも全く無縁のものではなかったのである。同じ時代を呼吸した短歌のみが持つひとつの時代様式がそこに揺曳している。それは、モダニズムという言い方で当時捉えられていたものであり、塚本のようにアバンギャルド(前衛)といえは政治的な意味をも含有しているように思える。

これらは大正期以降、日本にもたらされたのであるが、ヨーロッパ近代の芸術様式で、イギリスのイマジズムや未来派、キュビズム、ダダイズム、シュルレアリスムといったものをふくみこんでいた。

モダニズムの収斂された様式であるシュルレアリスムについて説明すると、例えばルイス・ブニエルの監督が撮ったわずか二十分ばかりの映画「アンダルシアの犬」に、そのシンボリックな構造をみることができる。

例えばその冒頭のワンシーンは、一人の男が夜にカミソリを研ぎ、おもむろに女の目を切り割いてしまう。一方のカメラは、夜の空に浮かぶ月を撮り、すうっと雲が月を隠していくのであ

る。こうした二つのイメージの連結は、シュルレアリスムの芸術家の得意とするところであった。

この様式は、無意識にある人間の恐怖や狂気といったものを、深層心理のなかから取り出してきて描くという手法である。ここで使われた二つのイメージの連結は、コラーージュやデペイズマンと呼ばれる技法である。

コラーージュは、別々の雑誌から切り抜かれた画や写真を、一枚の紙に貼り付けることで、一つの物語をつくっていく手法である。また、デペイズマンは、異なった環境に置くということを意味し、あるものを別な環境のなかに置くことで、物同士の奇異な出会いをつくることであった。たとえば、便器を「泉」と名付けて、美術館に展示するような試みをしてきた。

これらは一九世紀の詩人ロートレアモンが一〇〇年前に「マルドロールの歌」で述べた「手術台の上でのミシンとこうもり傘との出会いのように美しい」といった、偶然の結びつきによる詩の方法をシュルレアリストはよく引き合いにだした。

一九二四年にパリで、アンドレ・ブルトンがシュルレアリスム宣言をだすと、詩における動きは加速する。そこには二つのイメージの結びつきが、新しい世界を作るということであった。

「イメージは精神の純粹な創造物である。それは直喩から生まれることはできず。多か

れ少なかれたがいへだたつた二つの現実の接近から生まれる。接近する二つの現実の關係が遠く、しかも適切であればあるほど、イメージはいっそう強まり——いっそう感動の力と詩的現実性をもつようになるだろう……云々」(巖谷国士訳『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』、岩波文庫)

これはピエール・ルヴェルデイの言葉を、ブルトンが引用したものであるが、シュルレアリスムというものの根本的な方法というものをよく語っている。こうした芸術を創作する手法を短歌に導入したのが塚本邦雄である。

暗渠の渦に花揉まれをり識らざればつねに冷えびえと鮮しモスクワ

コクトーが屍にしろがねの髪そよぎ裂かれし鮭の肉にふる雪

前者は、『裝飾楽句』(昭和31)の作品。排水溝などへ桜の花びらが吸い込まれて、渦になっている様子が描かれ、下句でソ連時代の知られていないモスクワの様子が重ねられる。両者とも想像力を駆使することで、つねに新鮮であるという。二首目は『綠色研究』(昭和40)に収録されている。ジャン・コクトーの死は、心臓発作であったが、なにか惨憺たる死のイメージを連想させる一首となっている。

塚本邦雄が短歌に取り入れようとした様式は、シュルレアリスム様式を包含したモダニズムの様式であった。このような作詩法は短歌が戦後的なものを脱皮していくために、大きな功績があった。



第9章

中城ふみ子の作品解説

アドルムの箱買い貯めて日々眠る夫の荒惨に近より難し

**初出** 一九五四（昭和29）年六月「短歌」。アドルムとは敗戦直後に拡がった粗悪な睡眠剤で、中毒症状により死にいたるケースもあるほど強い薬だった。その薬の箱を夫の博がため込んである。薬を常用し、手が付けられないくらい荒んでしまった夫の状態を「近より難し」と伝える。

博は勤め先で不祥事を起こし、中途退職してからは、ふみ子の実家で暮らしていた。彼女の父親の計らいで帯広商工高等学校の教師となるが、半年も続かず土建会社や闇物資を扱う商事会社を起こす。しかし、それもうまくいかなかった。

ふみ子の死後、博はこの歌は虚構だ。アドルムを使ったことはない、彼女の歌仲間である新聞記者の山名康郎に、結婚当時のことを詳しく記した一冊のノートを渡している。その時、博は「歌によって復讐された」（山名康郎著『中城ふみ子の歌』）と嘆いていたという。これは文学に共通していえるが、歌も事実にはかりとらわれてはいけない。虚構でも、それにどんな意味があるのか考えると読みが深まり、作者の心に近づくことができる。

追ひつめられし獣の目と夫の目としばし記憶の中に重なる

**初出** 一九五一（昭和26）年四月三日「北門新報」。「獣の目」は作者自身の目を喩えて（たと）いる。離婚の話し合いで、三歳半の三男を夫側へ渡す話も出ていた。かわい盛りの息子を手放したくない思いや、他にも様々なことで追いつめられている内面を、字余りの初句と字足らずの二句が表す。

また、かつての夫も日々何かを追いつめられていたのかもしれないと、その目を思い出し、そこに同種の鋭い光と影を帯びた己の目を重ねたようにも思える。

これは、「ANIMALS」と題された一連にあり、夫と別居中に詠んで投稿している。彼女にはすでに想う男性がおり、抑えられない不純な気持ちや行動は自身の野獣性によるものだと、連作で物語っている。

一首だけでも何事かがあると思わせて読み手を引きこむ巧さがあるが、この連作には私小説的に一首一首が展開してゆく面白さがある。陰翳（いんえい）を帯びたいくつもの記憶は、作者のなかで解かれて再生され、次なる物語としてうたわれてゆく。

出奔せし夫が住むといふ四国目とづれば不思議に美しき島よ

**初出** 一九五四（昭29）年四月「短歌研究」。離婚後、元夫の博が四国へ出奔しゅっぺんしたことを知り、一家で暮らしていたこともあるあの美しい島で、いま彼がどのように過ごしているかを思つて詠んだと解釈するが、別の見方もできる。それは、一九四八年六月、博に四国鉄道局勤務の辞令がおりた後のことで、以前からぎくしゃくしていた夫婦関係を新天地で修復できるかもしれない。そんな期待があったとして、「目とづれば不思議に美しき島よ」と、当時を回想しているようにもとれる。

しかし、どちらにしても「出奔」とは、逃げて行方ゆくえをくまますことを意味するので、事実とは異なっており、作者が一連の物語性を重視して創作した歌となる。

掲出歌は「短歌研究」の第一回五十首応募作品の特選に選ばれた「乳房喪失」が初出で、そこでは、離婚後のことのように配置されている。しかし歌集『乳房喪失』では、歌の流れからみてまだ別居中である。このように同じ歌でも一連のなかでの置き方や、前後関係から一首のストーリー性が変わってくることもあって面白い。

背かれてなほ夜はさびし夫を隔つ二つの海が交々に鳴るこもしせ

**初出**『乳房喪失』。夫に裏切られたと思う夜は、いつそうさびしく感じられる。夫婦のあいだを分かつように、ふたつの海がかわるがわる鳴っているのが聴こえるのだ。

結婚後の夫の赴任先は、札幌、室蘭、函館、そして前のページでも触れているが、北海道から遠く離れた四国の高松である。この歌が詠まれた時、夫は先に高松へ行っていたと考えられる。「二つの海」とは、北海道と本州のあいだに位置する荒々しい津軽の海と、本州と四国のあいだにある穏やかな瀬戸内海を指しているのだろう。

では「背かれて」とは、どういうことか。高松への赴任辞令がおりた六月一四日のすぐ後に、ふみ子の妹の美智子が長男を出産し、その後、少ししてからふみ子は母と美智子に会っている。そこで夫婦関係がうまくいっていないことや、夫に女性がいることなどを涙ながらに話したと、短歌誌「樹樹」にある。

「交々に鳴る」とは、夫を許し難くて時に沸き起こる怒りと、平静さを取り戻した時に夫を恋しく思う気持ちを「二つの海」の印象に寄せて詠んだと解す。

本書は中城ふみ子生誕百年に向けて出版される。

中城ふみ子は、昭和二九年に彗星のごとく現れた歌人であって、その人気は未だに衰えることはない。

乳癌が転移して、三一歳という若さでこの世を去ったが、その魂の記録は『乳房喪失』『花の原型』という二冊の歌集に凝縮されている。

ふみ子の偉業を記念して、没後五〇年には中城ふみ子賞が創設されている。その賞を田村ふみ乃さんが受賞された頃から、二人で中城の本をまとめようと考え始めた。

その頃、立ち上がったばかりの、表文研（表現文化研究会）のホームページに、田村さんは、かなりのハイペースで、ふみ子の一首評を連載された。それに促されるように、私も中城研究を深めていった。

これは私の持論でもあるが、近代以降の短歌はその変革期に女性歌人が、まず活躍している。その女性歌人とは、明治和歌革新運動期の与謝野晶子。それから戦後短歌の変革期の中城ふみ子である。そして、八〇年代の口語短歌の俵万智をくわえてもいいだろう。私は今年、与謝野晶子についての著書（『与謝野晶子をつくった男——明治和歌革新運動史』、本阿弥書店）を出版したばかりであり、次は中城ふみ子だと漠然と考えていた。

中城ふみ子は、戦後という女性短歌の冬の時代に、絢爛たる花火を打ち上げた。それは近代短歌から現代短歌へと変わる関節の時期にもあたっている。昭和三〇年代には前衛短歌運動が、歌壇を華やかにしていたが、二〇年代の終わりに、ふみ子はその短い生を燃焼させて、短歌に詩的世界を描き上げた。その短歌には、冷徹なリアリズムと象徴的な手法とが入り混じり、独自の世界を展開している。そんなことをこの本で論証している。

われわれの研究がこのような形で出版されるのは、先人たちの研究の賜物でもある。参考文献目録でも紹介している通り、中城研究はますます厚みをもってきている。なかでも佐々木啓子さんの『中城ふみ子 研究基礎資料集』（旭図書刊行センター）を中心とする資料研究の成果に出あった時に、目を瞠る思いであった。その後、佐々木さんとのご縁によって、中城ふみ子関係の資料の提供を受けたことは、幸運の上もないことであった。しかし、これらの資料を更に深く探求していくには、多くの時間が必要である。今後とも研究を深めていきたいと思う。

写真資料についてもここに記しておかねばならない。関連の写真は、永山スミ氏、塚本青史氏、帯広市図書館などの協力もあって、本書に収載することができた。なかでも、「乳房よ永遠なれ」の映画のポスターは、中川研一氏のコレクションから提供を受けたもので、こうしたポスターが残されているのは珍しいことである。

それから、本文中の作品表記であるが、中井英夫編集の『定本中城ふみ子歌集 乳房喪

失―附花の原型―』（角川書店）を参照しながら、随時、初版本歌集や初出などを確認した。その折に、旧字を新字に改めている。若い人たちに、ふみ子の短歌の魅力を伝えたいためである。

また、本書の出版に際しては、クロスカルチャー出版の川角功成氏にお世話になった。クロスカルチャー出版からは、『詩人 西脇順三郎 その生涯と作品』を上梓しており、この本が、二冊目となる。

なお、本書は田村ふみ乃さんとの共著であり、それぞれの担当箇所は、前半の歌人の生涯と短歌史的な位置づけを加藤が、後半の作品解説と略年譜を田村さんが担当している。しかし、そのすべてにおいて両者が責任を負うことは言うまでもない。

いずれにせよ、中城ふみ子の生誕百年を前に、本書を出版することができたことは大変な喜びである。

令和二年八月三日

加藤孝男

中城ふみ子 略年譜

- 一九二二（大正一一）年 ○歳
- 一九二八（昭和三）年 五歳
- 一九二九（昭和四）年 六歳
- 一九三〇（昭和五）年 七歳
- 一九三二（昭和七）年 九歳
- 一九三五（昭和一〇）年 一二歳
- 一九三六（昭和一一）年 一三歳
- 一九三七（昭和一二）年 一四歳
- 一九三八（昭和一三）年 一五歳

一月二五日、北海道河西郡帯広町字西一条五丁目四番地に野江豊作、さくゑの長女として出生。本名富美子。両親は魚屋を営み、大正一二年、大通り南六丁目四番地へ移る。双葉幼稚園入園、中途退園。時期、理由は不明。親の職業欄には海産物商とある。

四月、帯広町帯広尋常小学校入学。童話や少女小説を読みふける。  
五月一日、妹（次女）美智子が生まれる。

四月、帯広町字東一条南六丁目一番地に移り、酒を主に雑貨、米等も扱うようになる。

七月二一日、妹（三女）敦子が生まれる。

四月、北海道庁立帯広高等女学校（現、北海道帯広三条高等学校）入学。痩せていたので（キューリー嬢）とあだ名がつけられた。

同校の同窓会誌「ときは木」に、詩「青いすいつちよ」を発表。

一月七日、弟（長男）豊が生まれる。

三月四日、劇「山小屋の夢」でヒロインを演じる。

- 一九三九（昭和一四）年 一六歳
- 一九四〇（昭和一五）年 一七歳
- 一九四一（昭和一六）年 一八歳

三月二二日、帯広高等女学校の校友会誌『ときは木』に野江富美子の名で三首掲載。

三月、北海道庁立帯広高等女学校卒業。  
四月、東京家政学院入学。同千歳寮に入寮。国文学者池田亀鑑の授業を受け、短歌の指導も受ける。同学院の池田亀鑑が命名した「さつき短歌会」がはじまる。卒業後も池田亀鑑と何度か文通をし、指導を受ける。慶応大学の学生、樋口徹也を知る。

八月二五日発行の第二輯「ひぐらし抄」に、二首掲載されている。「ひぐらし抄」は「さつき短歌会」詠草第二輯。

三月、東京家政学院卒業。迎えに来た母の勧めで帰郷の途中、旭川で歯科医と見合い。交際をするが、ふみ子から破談にした。しばらく実家と店と台所を手伝う。  
二五日発行の同学院会誌に随想「花の記」掲載。

五月六日、家政学院時代の親友、弥吉文恵宛手紙。「亀鑑先生の様に清潔な大人のひとなんて見たくとも見あたりません。あんまり亀鑑先生のことを言ふと又あなたは先生の価値を過大視してゐると笑はれさうですけどその理想がなかつたら私も俗っぽい大人のお仲間入をしてしまいたいさうなの」『中城ふみ子論』一四四頁）

一二月二五日発行の第三輯「おち葉抄」（「さつき短歌会」詠草第三輯）に六首掲載。

- 一九四二（昭和一七）年 一九歳

四月、四歳年上の中城博と札幌にて結婚。博は北海道帝国大学工学部出

## 加藤孝男 (かとう たかお)

1960年生まれ。東海学園大学人文学部教授。1988年「言葉の権力への挑戦」で、現代短歌評論賞受賞。著書に『美意識の変容』(1993)、『現代歌人の世界 8 篠弘の歌』(1996)、『近代短歌史の研究』(2008)、『詩人西脇順三郎 その生涯と作品』(共著、2017)、『与謝野晶子をつくった男 一明治和歌革新運動史』(2020)など。歌集に『セレクション歌人13 加藤孝男集』(2005)、『曼荼羅華の雨』(2017)などがある。

## 田村ふみ乃 (たむら ふみの)

1976年生まれ。武庫川女子大学文学部国文学科卒業。民族学関連の学術誌の編集など手掛けてきた。2011年秋、短歌結社「まひる野」入会。2012年「京都歌人協会短歌大会」優秀作品賞、2013年「日本歌人クラブ全日本短歌大会」優良賞、2014年「与謝野晶子短歌文学賞」関西テレビ放送賞、2016年「中城ふみ子賞」、同年「まひる野賞」受賞。第1歌集『ティーバッグの雨』(2018)出版。

## 歌人 中城ふみ子 その生涯と作品

CPC リブレNo.15

2020年10月31日 第1刷発行

著者 加藤孝男・田村ふみ乃

発行者 川角功成

発行所 有限会社 クロスカルチャー出版

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町 2-7-6

電話03-5577-6707 FAX03-5577-6708

<http://crosscul.com>

印刷・製本 シナノパブリッシングプレス

© T.Kato, F.Tamura 2020

ISBN978-4-908823-72-5 C0095 Printed in Japan